論文

光源氏の生涯

上野辰義

〔抄録〕

源氏物語の主人公光源氏の生涯は、部分部分、事件事件、性格の特質などの視点で、個別に論じられることが多かった。本稿では、決して多くはない先行研究に導かれ、光源氏の生涯を、ライフサイクル論的視点から区分し、彼の生涯の特質を考えてみた。特に、光源氏の生涯を考えるには、彼の誕生前史、彼の父である桐壺帝の寵妃で光源氏の母である桐壺更衣に対する愛恋の問題を重視する必要がある。

キーワード　源氏物語、光源氏、ライフサイクル、紫上、桐壺帝

一　源氏の物語

源氏物語の作者と判断される紫式部は、自作を「源氏の物語」と、「の」を入れて呼んでいた。彼女の日記に、

うちのうへの、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、……

源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例のすずろごとども出できたるついでに、……

とあるのは周知のことだろう。その「源氏」が、我々の光源氏を指すことも、次でわかる。

左衛門の督、「あなかしこ、このわたりに、わかむらさきや、さぶらふ」とうかがひたまふ。源氏にかかるべき人も見えたまはぬに、かのうへは、まいていかでものしたまはむと、聞きゐたり。

（紫式部日記―日本古典文学大系本による）

「わかむらさき」で紫上を指していることも興味深いが、これらによって、作者は、源氏物語を、光源氏の物語と理解していたことがわ

かる。これは、平安時代末から鎌倉期の源氏一品経や原中最秘抄、紫明抄が、この物語を「光源氏（之）物語」と呼んだことにも繋がっていく[1]が、そのように呼ばれ、理解されるのは、「光源氏は此物語のもとだち」（源氏四十八ものたとへの事（『国語国文学研究史大成3源氏物語上』による））、基立ち・根本だからである[2]。

当時の伝奇的な作り物語の始原は、「一族の祖先の、出自の凡ならざる尊さをいはんが為の伝承」、「家々の祖先・英雄譚の信仰であるカタリゴトが、信仰より離れ、社会的に進出したところに[3]」求められる。であるから、物語の「もとだち」主人公は、「神秘的な分子は後世薄らいでも、人格に於ても、容貌等に於ても、竝の人より優れてゐ」て、「多くはその時代の優れた型の人、作者の理想的人物」であり、そうした主人公の不世出を誇張し、強調するため、「出自の珍しいこと」、「神秘な出自を説く貴種流離譚の説話[4]」が一様式として選ばれたりした。源氏物語の「もとだち」光源氏も、両親である桐壺帝と更衣の緊迫した尋常ならざる愛の因縁を背負って、超人的な人物として登場してきた。

さきの世にも、御契りや深かりけむ、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。（桐壺六）

であるから、源氏物語は、桐壺源氏の始祖である光源氏の伝奇的な生涯を語るものとして、そもそもある。それゆえ五十四帖の物語を、光源氏の生前の物語と死後とに分け、生前の物語も光源氏の栄華の極点で前後に区分するのは十分理由があり、また、彼の人生の種々のエピソードを、長編的なそれ、短編的なそれと腑分けしてそれぞれの連関を分析するのも、光源氏の生涯の構造を理解するうえで十分意味があるのだが、桐壺源氏の始祖となる光源氏が、彼の存在を規定する貴族社会のありようや、彼を取り巻く複雑な人間関係の中で、どのように判断し、行動し、また成長して、源家の始祖たるべく偉大な生涯を築くことができたのか、その軌跡を、光源氏の人生史として把握することもごく自然な、かつ基本的な源氏物語理解のありかたであろう。

しかし、近代の源氏物語研究の基となった藤岡作太郎博士の『国文学史平安朝篇』（東京開成館、一九〇五年）が、「源氏物語の本意は実に婦人の評論にあり」、「源氏は一篇の主人公なりとはいへ、むしろ夥多の女子を聚中する方便に過ぎず」と喝破し、和辻哲郎が、光源氏を統一した人格の持ち主として捉えがたく心理の動き方も荒唐無稽であると説いたりしたこと（「源氏物語について」『思想』一九二二年十一月）の影響が、おそらく長く残り、光源氏の個々の特性は豊饒に語られながら、一人の人間としてその一生を見る、という視点は、これまで弱かったように見られる。久松潜一博士が、幻巻以前の四十一帖を、光源氏の青春時代・栄華時代・晩年時代に分けられたのも、物語の組織を見るためであった[5]し、森岡常夫博士が、「物語はある人の物語である」と述べて、「光る源氏の世界を青年・中年・晩年の三期に区画して考察」されたのも、彼の人生を観るためではなく、「源氏の世界の構成[6]」を見るためであった。岡崎義恵博士や重松信弘博士が同様に、光源氏の青年期・中年期・晩年期に分けられたのも、構想研究のためである[7]。

そうした中で、池田弥三郎博士が、文字通り『光源氏の一生』とい

うタイトルの本で、博士の師折口信夫の説を受け止められながら、「『光源氏の一生』という筋道に、源氏物語の内容を再編成してみ」られたのは、注目に値する。また、高橋和夫氏も、「光源氏の生涯」という論考で、源氏物語を、「源家の祖、光源氏の生涯の物語」と捉えて、氏の光源氏十歳ごとの構想説に則り、藤裏葉巻までの光源氏の生涯を、異性への思慕・風流への憧憬・政治権力への志向などの内的動力の視点から論じられた。[8] それぞれ参考になる説が多いが、小論では、人生の体験と年齢による成長という点に留意しながら、光源氏の人生について幾つかの点を述べてみたい。

二　人生の区分（一）

源氏物語の年立、年紀は主人公光源氏の年齢で立てられる。彼の死後はその「子」薫のそれによるが、それはもっとものことであり、他の人物、例えば紫上のそれによるならば、光源氏による以上に、不都合・矛盾が露呈するであろう。ただ、光源氏の年齢によってもカバーできない時間がある。光源氏が誕生するまでの両親の宮廷での恋愛史、光源氏前史の時間である。桐壺巻頭の状況から光源氏の誕生、すなわち光源氏一歳の年まで、最低一年は存在するが、それ以上どれだけの時間が流れているのか、つまり光源氏マイナス何歳の年から光源氏前史、源氏物語は語られているのかという問題である。[9] だがおそらく、両親の恋愛史は、光源氏の人生にとってかれらの具体的時間の流れより、その状況・内実が大事だったのだろう。このことについては、また後に考えることとして、ともかく源氏物語の年立は、光源氏の誕生の年から立てられる。

光源氏は桐壺第一年に誕生して、幻巻五十二歳を最後に物語から退場していくが、その五十二年間はどのように区切れるのだろうか。人の年齢・成長変化による呼称としては、チゴ・ワラハ・オキナ・オウナなどが、源氏物語には見えるが（作中、ヲミナは女郎花の例ばかりで、ヲトメは歌語とみるべき状況である）、こうした肉体・物理的状態で人生を区切るべきではなく、それらとも相関しながら、前節に紹介した先学のように、人の内面的変化・成長による区分がやはり適切だろう。先学が立てていなかった幼童（幼年・児童）期を加えて、青年期・中年（成年）期・老年（晩年）期の四期である。幼童期には、光源氏前史を含めておくのが便宜だろう。この区分は、現代のライフサイクル（人生周期）論と比較すると、ライフサイクル論を体系づけた、E. H. エリクソンの八区分[10]の内、乳児期・幼児期初期・遊戯期・学童期の四つが、幼童期に当たり、思春期・成年前期が、おおよそ青年期に、成年期が中年期に、老年期が老年期にそれぞれ対応するであろうが、二十世紀の市民社会と千年前の日本の貴族社会とは、平均寿命も生活システム・社会構造・文化風習も大いに異なるから、年齢的区分をはじめとして、そのままには援用できない。しかし、誕生・教育・人格的成長・結婚・社会的貢献・老化による第一線からの後退・死、というライフサイクルの概要は、現在も過去も大きくは異ならないだろうから、エリクソンの論を踏まえて、それぞれの期の間に過渡期を設け、成人（成年）期を、個人の本質と社会の本質との両

方を考慮してより複合的に捉えようとした、D．レビンソンの説[11]ども、特に中年期の危機・特質など参考にできる論があるだろう。

しかし、古代の日本に、このようなライフサイクル的な観点が存在していたのだろうか。

まず、想起されるのは養老令（日本思想大系『律令』による）だろう。「戸令」第六条には、

凡男女。三歳以下為レ黄。十六以下為レ小。廿以下為レ中。其男廿一為レ丁。六十一為レ老。六十六為レ耆。無レ夫者。為二寡妻妾一。

とあり、課口の範囲によって男は、数え年で二十一歳以上六十歳までを、「丁」、六十一歳から六十五歳までを「老」、六十六歳以上を、「耆」とした。これにより課役は、中（中男）、丁（正丁）、老（次丁）と身体に障害のある者の内「残嫉」（次丁）とに負わされた[12]。また、同じく「戸令」第二十四条には、「凡男年十五。女年十三以上。聴二婚嫁一」ともあり、男性は十代半ば大よそ「中」以降われわれの「成人」として扱われ、体力と経験に応じた課役負担の差による区分が、二十一歳、六十一歳、六十六歳に設けられた。

また、時代が下るが、花伝書（風姿花伝）（川瀬一馬校注、講談社文庫による）では、「第一年来稽古条々」に、年齢による能の技量の「花」の展開を、大よそ次のように区分して説いている。

七歳　一、この芸において、大方七歳をもて初めとす。……。

十二三より　この年のころよりは、はや漸々声も調子もかかり、能も心づくころなれば、次第次第に物数も教ふべし。まづ童形なれば、なにをしたるも幽玄なり。声も立つころなり。……。児といひ、声といひ、しかも上手ならば、なにかは悪かるべき。さりながら、この花はまことの花にはあらず。ただ時分の花なり。……。

十七八より　このころはまた、あまりの大事にて、稽古多からず。まづ声変りぬれば、第一の花失せたり。てい（体）も腰高になれば、かかり（＝風情趣き）失せて、（以前と演じ方も変化して、自信を失う。耐えて精進する時期だ。）……。

二十四五　このころ、一期の芸能のさだまる初めなり。さるほどに、稽古のさかひなり。声も既になほり、ていもさだまる時分なり。……。（声と身形が定まって）歳盛りに向かふ芸能の生ずるところなり。……。これもまことの花にはあらず。年の盛りと、見る人の、一旦の心の珍しき花なり。……。

三十四五　このころの能、盛りの極めなり。……。あがるは三十四五までのころ、さがるは四十以来なり。（天下の名望を得て、まことの花を極めるなら、この時期である。）……。

四十四五　……。能はさがらねども、力なく、やうやう年たけゆけば、身の花も、よそめの花も、失するなり。……。（脇に花を持たせて、自身は所作を少なくする）。もしこのころまで失せざらん花こそ、まことの花にてはあるべけれ。……。

五十有余　……。麒麟も老いては駑馬に劣ると申すことあり。さりながら、まことに得たらん能者ならば、物数はみなみな失せて、善悪見所はすくなしとも、花は残るべし。

以上を概括すれば、数え年七歳から稽古を始め、十五六歳までは童

形でその時分の花があるが、第二次性徴期を経験して、十七八歳からは、体の変化に応じて演じ方を変えねばならず、二十四五歳ころは、全盛期に向かう芸力の発生する頃であるが、若さ（原文「年の盛り」）と物珍しさによる花である。三十四五歳が、芸の頂点で、まことの花の咲く時期で、四十歳からは衰えていく。五十歳以降は、演じないのが最善だが、真に道を究めた者は花を残すことができる、となるだろう。成長と体力と稽古に応じて区分され、十代半ばに「成人」してからは、二十代半ばに若盛りの時期を迎え、三十代半ばで芸の全盛期となり、四十歳からは下降していき、四十代半ばには体力と容貌の衰えを自覚して控えめに演じ、脇に花を持たせるべきで、五十歳を過ぎれば、余程のものでなければ引退すべき、というものだ。古代の戸令とは、時代も視点も異なるが、十代半ばに童（児童・少年）と成人（青年）との境を置いていることは共通している一方、「老年」の区分は六十歳と四五十歳とで、ずれている。

こうした中で、源氏物語を見てみると、男性貴族の場合、幼童期と成人（青年）期との境を見てみると、社会的には元服・結婚がそれであろうが、元服の年齢を見ると、光源氏十二歳、冷泉帝十一歳、夕霧十二歳、今上帝十三歳、薫十四歳と十代前半であり、光源氏・今上帝は引き続き結婚している。だが、光源氏の元服に際して、「いとかうきびはなる程は」「いときなき初元結に」「いときびはにておはしたるを」と繰り返されるように、実質はいまだ幼童期であり、一般的認識としては、戸令や風姿花伝のように、十代半ばが成人（青年）期との境にあたると見ておいてよいであろう。日本人の生体的発達が古代・中世の間に大きく変動していたとは考えにくい。であるから、光源氏の十二歳における元服・結婚を語った桐壺巻のあと、次の帚木巻が十七歳（旧年立では十六歳）の光源氏に雨夜の品定めの女性論議を体験させるところから始まっていることには十分な理由と意味があるのである。ここから、成人（青年）期に入って、戸令と風姿花伝とで相違していた老年期は、源氏物語では、三十代を過渡期として、四十歳からとしておいてよいだろう。それについて、以下述べる。

老年期に関わる諸語、源氏物語での「翁」「嫗」「老い人」「老い」という言葉については、永井和子氏が既に詳細に論じられているので、[13] その御論に拠りつつ、光源氏に関わって述べるならば、「翁」と「老い」が彼の老年に関わっている。女性に関わる「嫗」はもちろん、「老い人」も、「源氏物語においてはかなり限定され、老齢男性や身分のある老齢女性、には用いられず、『年をとった女房など』の意味にのみ使われている」[14] からである。

「翁」との比較で、一応「嫗」について言及しておくならば、年齢の分かる例を見ると、鬚黒は、三五歳から三七歳の北の方である式部卿宮の大君を「嫗とつけて心にも入れず、いかで背きなん、とおも」（藤袴九二八）っていた、また、八十歳あまりの横川の僧都の母尼は、「嫗は、昔、あづま琴をこそは、事もなく弾き侍りしかど」（手習二〇一七、「嫗」の部分、大島本をはじめ有力諸本の表記は全て「女」であるが、年齢から「嫗」「老女」と解する説による）と自称していた。鬚黒北の方の例は卑称だから、割り引く必要があるが、四十歳前後には「嫗」と呼び得たとわかる。永井氏は、「結果として『嫗』の登場は場

面を、おどけた、喜劇性を持つ場に転化する」と言われる。

さて、光源氏と関わりを持つ「翁」について、永井和子氏は、源氏物語中二十例の「翁」「翁ぶ」「翁言」の例を検討され、それらが「会話文中における中高年貴族の自称と、地の文における身分の低い老齢男性の称」とに、二極分化されるが、永井氏は「この両者の根底にあるものはやはり老齢の持つ理解を越えた存在ということだろうか。老人の持つ知恵成熟の面ではなく、老人であること自体にかえって人間を見るのである」と言われ、「世ばなれした、『よくわからない老人』」という、「翁」の語がもつ特性を主張される。[15] その後者の「地の文における身分の低い老齢男性」らは、具体的な年齢が不明だが、前者「会話文中における中高年貴族」の年齢を見ると、「翁ぶ」「翁びはつ」の二例、すなわち、三十六歳の光源氏本人が、「なにとなく翁びたるここちして、世間のこともおぼつかなしや」（常夏八二九）と発話し、二十七歳の薫が自身の心地を会話で「翁びはてにたる心地」（蜻蛉一九七〇）と評する例、および二十七歳の薫の歌が「翁言」と会話で評された例（蜻蛉一九七九）を除いて、他のいずれも本人の自称とはいえ、四、五十代の男性上流貴族のものである。

人の上にても、もどかしく聞き思ひし古人[16]のさかしらよ、身に変はることにこそ。いかに、うたての翁や、とむつかしくうるさき御心そふらむ。（若菜下一二一〇、光源氏四七歳）

それらの内、藤裏葉巻の内大臣の年齢を永井氏は、「四十歳位」とされる。同巻三十九歳の光源氏との関係を考えれば妥当な判断だが、帚木巻での二人の官職、光源氏の中将に対して、桐壺巻末時の蔵人少将を経て、頭中将になっているのを見ると内大臣の方が先に官界に入って先行しており、一世源氏の光君に、「おのづからかしこまりもえおかず」（帚木三六）にいられるのも、宮腹の左大臣長男であるからのみでなく、内大臣の方が年長であるからしく、さすれば少なくともこの時四十歳以上であろう。こうして「翁」は、具体的な登場人物に即してみるならば、三十代半ばを過渡期として（二十七歳の薫は個別の事情によるだろう）、自称という点に留意されるが、四十代以降の男性に使われうるものであろう。「媼」の場合と年齢的にほぼ呼応するのである。

「老い」関係諸語についても永井氏が整理しておられる。氏によれば、地の文においてそれらの語で指示される二九例のうち、二二例を、女房（「老い御達」・「老いたる尼君」など）・僧（「老い法師」・「老いかれにたれど」など）が占め、他は、譬喩三例、やや身分の高いもの二例（「老い給へる上達部たち」・宮大夫「老いしらひて」）であり、主要人物二例は、右大臣「老いの御ひがみ」（賢木）・弘徽殿大后「老いもておはする」（少女）で、否定的な意味合いとなる理由があると言われる。会話文中には二十八例あり、発言者は主要人物が中心で、十二例は自分自身の老いを言うもので、女五の宮・大宮・光源氏（三例）・明石の入道（三例）・夜居の僧・左大臣（二例）・玉鬘乳母・夕霧・北山の聖らによるものである。他者に関わっていう場合は、光源氏が柏木に、「老いは、えのがれぬわざなり」と述べたように、優越者が弱低者に向かって使用するとされる。心内語・歌・消息の場合も、これらと同様であるという。これらの内、年齢が明確なものは、明石

の入道（六十歳ばかり、六十四歳程、七十四歳程）、左大臣（五十六歳、六十三歳）、夕霧（老いねど、少女、十二歳）であり、否定される夕霧を除いて、いずれも五十歳以上である。

光源氏本人に関係するものを見てみるなら、動詞「老ゆ」一例を含め、次の五例のみである。

①幸ひにうちそへて、なほあやしうめでたかりける人なりや。老いの世に、持たまへらぬ女子をまうけさせたてまつりて、身にそへてもやつしぬたらず、やむごとなきに譲れる心おきて、こともなかるべき人なりとぞ聞き侍る。（少女六七八）

②人よりことにかぞへとり給ひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。しばしは老いを忘れても侍るべきを（若菜上一〇五四）

③かう世を捨つるやうにて明かし暮らす程に、年月のゆくへも知らず顔なるを、かうかぞへ知らせ給へるにつけては、心細くなむ。ときどきは、老いやまさると見たまひくらべよかし。（若菜上一〇五七）

④過ぐる齢にそへては、酔ひ泣きこそとゞめがたきわざなりけれ。衛門の督心とゞめてほゝ笑まるゝ、いと心恥づかしや。さりとも、今しばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老いは、えのがれぬわざなり。（若菜下一二一七）

⑤年経ぬる人におくれて、心をさめむかたなく忘れがたきも、たゞかゝる仲の悲しさのみにはあらず。幼き程より生ほしたてしありさま、もろともに老いぬる末の世にうち捨てられて、わが身も人の身も思ひ続けらるゝ悲しさのたへがたきになむ。（幻一四一三）

②～⑤の4例は全て四〇歳以後の光源氏の発話で、②③からは、四十賀が老いの認識と連関していたことがわかる。①のみが、それ以前、光源氏三十三歳の時、他者である内大臣の発言中のものである。明石御方が光源氏の娘、明石姫を生んで、紫上に姫を託したことを誉めている。明石姫の誕生は、澪標巻光源氏二十九歳時、いずれにしても、それから発話現在までの時期を、光源氏の「老いの世」と称するのは理解しがたいのだが、内大臣が光源氏の娘の存在を知ったのは、光源氏三十一歳松風巻で、明石御方が明石尼君と明石姫とともに上京し、大堰の山荘に入り、光源氏が嵯峨野の御堂を訪問しがてら、明石御方を見舞った頃であったろうから、その時点で内大臣は光源氏より年長と思われ、常夏巻三十六歳の光源氏は、自身を「なにとなく翁びたるここちして」と戯れ言も言っているし、三十代は中年期と重なりつつ老年期への移行期とも見られていたからではないだろうか。より年長で「老い」を意識しつつあった内大臣の、政治的ライバル光源氏が三十歳前後に娘を得たことに対する怖れ妬みも作用していなかったか。その姫が政治的に使えるようになるのは早くても十年後、光源氏の四十歳頃、光源氏の「老いの世」ではあるのだが。

このように、「老い」諸語は、三十代を過渡期にして、四十歳代以降に使われるもののようだ。

こうして、光源氏の成年（青年・中年）期は、十代半ばを幼童期との境にして始まり、三十代の過渡期を経て四十歳から老年期に移行すると考えられる。前述の明石の入道・左大臣の場合と矛盾はしない。

では、その成年期はどのように区分できるだろうか。戸令では、十

七歳から二十歳までの「中」男、二十一歳から六十歳までの「丁」に区分し、風姿花伝では、十七八歳以降、二十四五歳の若盛り、三十四五から三十九歳までの全盛期を区分していた。

源氏物語では、外見の美しさと関わった「盛り」の語は、女性の場合、十代後半から二十代半ばまで、人によっては三十代・四十代初めまで使われる。八歳の明石姫は既に美しいが、夕霧の目には、「まして盛りいかならむ、と思」（胡蝶）われる。確認できる年齢が次に若い十七歳の今上の女二宮は、仕える女房たちから、「この御容貌のいみじき盛りにおはします」（蜻蛉）と認識されている。二十歳前後から二十代前半は、「盛り」「盛りなり」と語り手や周囲の人物から評価される。例えば、年齢の若い順に挙げれば、「いとうつくしげにて、盛りに見どころあるさまを見」（竹河、玉鬘の大君十八・九歳）、「盛りに調ひて、あたらしううつくしげなり」（梅枝、雲居雁二十歳）、「あざやかに盛りの花と見え給へり」（宿木、夕霧六の君二十一・二歳）、「世を籠めたる盛り」（手習、浮舟二十二歳）、「八重山吹の咲き乱れたる盛り」（野分、玉鬘二十二歳）、「いと盛りにきよらなる御髪」（柏木、女三宮二十二・三歳）、「恥づかしげに、盛りにとゝのほりて」（紅葉賀、葵上二十三歳）、「いと盛りにて」（総角、中君二十四歳）、「いと盛りに匂ひ多くおはする人」（早蕨、中君二十五歳）、「若く盛りの子」（葵、葵上二十六歳）などと、言われるが、同じ二十六歳になると、本人の後ろ向きの自己評価だが、「やう〳〵盛り過ぎぬる身」（総角、大君二十六歳）とも言われ出す。年齢が確認できないが、光源氏三十六歳の初音巻では、語り手は花散里を、「御髪などもいたく盛り過ぎにけり」と言い、同じく末摘花を、「いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰いゆき」、と評す。

だが一方、紫上は、二十代後半から三十代前半にいたっても、「盛りにきよらにねびまさり給へり」（玉鬘、紫上二十七・八歳）、「いとけだかう盛りなる御けしき」（藤裏葉、紫上三十一歳）、といわれ、光源氏の目に紫上は、「めでたき盛りに見えたまふ」（若菜上、紫上三十二歳）。三十代後半以降になった女性でも、三十七歳の藤壺宮は、死に近づいても、「されど、いと若く、盛りにおはしま」（薄雲）し、四十八歳の玉鬘は、「いと若うきよげに、なほ盛りの御容貌と見えた」（竹河）。美しさの盛りの状況の持続は、個人差が大きかったのだろう。

「若盛り」の語例が女性に関して一例見える。橋姫巻で、柏木の乳母子であった弁が、従妹で女三宮の乳母子であった小侍従を、「小侍従はいつか亡せ侍りにけむ。そのかみの若ざかりと見侍りし人は、数少なくなり侍りにける末の世に」（橋姫一五三九）と言っている。「そのかみ」がいつを意識しているか不明だが、仮に若菜下巻の女三宮柏木事件時とすると、柏木は三十一・二歳、女三宮は二十一・二歳で、それぞれの乳母子であった弁と小侍従も、おそらく主人と近い年齢であったのだろう。小侍従はこの当時「もの深からぬ若人」といわれてもいる。「若盛り」とは二十歳前後を指しているのだろう。鈴虫巻で、女三宮に従って尼となった侍女たちの内、「若き盛りのも、心定まり、さるかたにて世をつくしつべき限りは、選りてなむなさせ給ひける」（鈴虫一二九五）とあるのも、そうした年齢なのだろう。

これらに対し、男性の「盛り」を見ると、女性と同じく「若盛り」

が一例ある。四十八歳の玉鬘の邸を十五歳の薫が新年の挨拶に訪れた個所、先に来訪した四十一歳の夕霧右大臣と比較された、玉鬘の目に映った薫のさまである。

「大臣は、ねびまさり給ふまゝに、故院にいとようこそおぼえたてまつり給へれ。この君は、似給へるところも見え給はぬを、けはひのいとしめやかになまめいたるもてなしゝもぞ、かの御若盛り思ひやらるゝ、かうざまにぞおはしけむかし」など、思ひいでられ給ひて、うちしほれ給ふ。（竹河一四七〇）

玉鬘が知っている光源氏は、三十五歳以降の光源氏で、それ以前の見たことのない光源氏の「若盛り」のさまを、十五歳の薫から想起している。宿木巻には、二十歳前後の夕霧の息子たちを、「いづれとなく若く盛りにて、きよげにおはさうずる御子ども」（一七六八）と言っている例もあり、竹河巻例は、十五歳の薫の落ち着いた優美さに、光源氏の若盛りを想起しているのだから、想定される「若盛り」の一般的な年齢はもう少し高いのかもしれない。それでも女性とほぼ同じく十代後半から二十歳前後を指すのだろう。

男「盛り」も「若盛り」の時期を含みながら、十代後半から四十歳ころまで、そのように言われるが、少しずつ内容は変化しているようだ。二十代までは容貌を中心に「盛り」の時期である。

（夕霧十八歳）「容貌（かたち）など、ただ今のいみじき盛りにねびゆきて」（藤裏葉九九八）

（光源氏二十一～二十五歳）「あはれ、光源氏と言はゆる御さかりの大将などにおはせしころ」（紅梅一四五三）

（夕霧息宰相の中将二十七・八歳）二十七八のほどの、いと盛りに匂ひ、はなやかなる容貌し給へり。（竹河一五〇〇）

だが、二十代も終わりころになると、二十九歳の夕霧は、「このころこそねびまさり給へる御さかりなめれ」といわれながら、「もの思ひ知らぬ若人のほどに、はたおはせず」（夕霧一三六二）と、「若人」とは見なされなくなり、三十一歳の光源氏は、「言はむかたなき盛りの御容貌なり」と言われながら、「いたうそびやぎ給へりしが、少しなりあふほどになり給ひにける御姿など、かくてこそもの〳〵しかりけれ」（松風五九三）と、体形の変化が言及される。三十代後半からは、三十六歳の光源氏が、「盛り過ぎたる人は、酔ひ泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」（篝火八五七）と、自虐しているように、世間的には「盛り」を過ぎる時期のようだが、子の夕霧が見る三十六歳の光源氏は、「親ともおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛り」（野分八六五）であり、娘玉鬘の見る三十七歳以上の内大臣も、「きら〳〵しうものきよげに、盛りにはものしたまへど」（行幸八八六）興中の主上と比べると限度があった。さらに、四十歳を越えても、四十賀時の光源氏は、「なほいと若き源氏の君に見え」たが、同時に四十一歳以上の太政大臣は、「今盛りの宿徳とは見え」（若菜上一〇八四）た。このように、二十代終りには、「若人」とは言われなくなり、体形の変化も起こり、三十代後半からは、「盛り」を過ぎたりして、単なる若さの盛りではなくなってくる。

これに関わって、「さだすぐ」と言う語句がある。岩波古語辞典補訂版に、「さだ」は「《シダ（時）の母音交替形》①時機。②盛りの年

齢。」（引用例省略）とあり、「さだすぐ」の場合は、「②盛りの年齢」にあたる。源氏物語の場合を見ると、女性では、紫上の祖母尼（若紫、四十歳ばかり、兵部卿宮発話）、源典侍（紅葉賀、五十七・八歳、光源氏思惟）、朝顔姫君（朝顔、朝顔姫君思惟）、花散里（少女、「やゝさだ過ぎたる心地」、夕霧思惟）、弘徽殿太后（少女、「いといたうさだ過ぎ給ひにける御けはひ」、光源氏思惟）、玉鬘（竹河、五十六歳、玉鬘発話）、弁尼（宿木、六十三歳近く、語り手）、小野の尼たち（手習、母尼八十歳余り・妹尼五十歳ばかり、語り手）たちが、「さだすぐ」と言われる。光源氏三十二・三歳と同世代かと思われる、朝顔姫君自身による思惟、花散里に関する十二歳の夕霧思惟による「やゝさだ過ぎたる心地」の印象の他は、四十歳以上の女性たちである（小野の尼たち全員がそうとは言えないが）。

同じく男性たちを見ると、光源氏（若菜下、四十七歳、光源氏自身の発話）、冷泉院（竹河、四十四歳、冷泉院自身の消息文）と拾え、いずれも本人自身の発話や消息文におけるものであることが注意されはするが、やはり四十歳以上である。ちなみに、作者の日記、紫式部日記にも、藤原顕光六十五歳の例がある。

このように、以上の諸語の用いられる様子を男性中心に見てみると、個人差はあるものの、十代後半から二十歳前後の容貌を中心とした若盛りの時期（青年期）となり、二十代終り頃から「盛り」の年代（中年期）に移行し、三十代半ばころから過渡期を迎えて、四十歳ころから、「老い」「さだすぐ」と言いうる年代（老年期）へ移行していくようだ。そして、青年期以前、十代半ばころまでは、幼童期と呼んでおいてよいだろう。

これを、宣長の新年立（〔　〕内は兼良『花鳥余情』の旧年立）での光源氏の年齢によって、過渡的期間を措いてより明確な区分として、巻にあててみると、幼童期は桐壺巻（一歳～十二歳）。十三歳から十六〔十五〕歳の事記事なし空白。青年期は帚木巻～澪標（関屋）（十七〔十六〕歳～二十九〔二十八〕歳）。三十〔二十九〕歳の事記事なし空白。中年期は絵合巻～藤裏葉巻（三十一〔三十〕歳～三十九歳初冬）。老年期は若菜上巻～幻巻（三十九歳冬～五十二歳）となるだろう。これを、本章冒頭に言及した先学の区分に照らせば、以下いずれも桐壺巻での幼童期を区分していないが、それ以後は、久松潜一博士の青春時代・栄華時代・晩年時代、森岡常夫博士の青年期・中年期・晩年期、重松信弘博士の青年期・中年期・晩年期と一致している。光源氏の生涯・ライフサイクル的視点による区分と、物語の展開・構成的視点による区分とに、一致するものがあるということである。

三　人生の区分（二）

ところで、人の生涯は、今まで視点としてきたような人間の身体的成長・変化のみを問題として区分されるわけではない。先にも触れていたように、個人を取り巻く、家族・仲間・社会等、外界との相互の人間関係の進展と複合した、個人の人格の成長・内面的変化として本来はある。一般的に述べれば、幼童期は、家庭内の庇護のもとで、大人になる準備をする時期であり、青年期は、身体的能力の最盛期で、

成人として認められて、社会的に自立し、結婚して家庭を持つ時期であり、中年期は、身体的能力は下降しつつも、社会的能力・地位は最高に達し、子世代が自立していく時期であり、老年期は、自己の死をより意識して、社会的に引退し、孫世代の生長を見ていく時期である。

こうした視点で、光源氏の生涯を見直していくとき、彼の人生に大きな影響を与えた外界としては、出生前は、両親桐壺帝と桐壺更衣との宮廷・貴族社会での孤立した愛のありようが前史としてあり、出生後は、上級貴族社会の真っ只中を生きる人間として、決定的社会的影響を受ける天皇位の推移、桐壺帝・朱雀院・冷泉帝・今上帝との関係、異性愛の始原となった藤壺宮との関係の変化がある。こうした人物たちとの関係の変化をさらに考慮して、光源氏の幼童期・青年期・成人期・老年期と、その内部をみてみると、次のようになるだろう。

時の帝を父に、更衣を母にもって生まれて、一世源氏となった光君の幼童期、青年期の得意は、

七つになり給ひしこのかみ、帝の御前に夜昼さぶらひ給ひて奏し給ふ事のならぬはなかりしかば、この御いたはりにかゝらぬ人なく御徳をよろこばぬやはありし。（須磨四一一）

と、語られるように、無念の末亡くなった寵妃の遺児で、帝王位にも昇るべき美質と才能を有していたことにより得た、父帝の寵愛を背景に、陰に人事を掌握して権力を行使したことによる。請われて左大臣家の婿となったことも有意に作用している。「七つになり給ひしこのかみ」とある七歳の年は、兄第一皇子の立坊に失望し、祖母が他界した翌年、光源氏が読書始めをした年で、高麗人の相人の観相以前ではあるが、彼の将来を思案する父帝の叡慮のもと、一世源氏として臣下の道を実質的に歩み始めた光源氏は、早くもその政治的能力の有能さを発揮していたのである。これ以後、高麗人の相人の観相、賜姓源氏の聖意、藤壺入内、光源氏の元服、左大臣娘葵上との結婚、と語られていくので、光源氏の幼童期は、六歳までの幼児期と、七歳からの児童期とに分けることができる。

だが、幼童期から青年期へと続く光源氏の得意は、父帝が退位することで弱体化し、父院の、兄朱雀帝への、光源氏の実子東宮・光源氏本人に関する遺言がなされながらも、崩御することで失われた。桐壺帝の譲位、朱雀帝の即位、冷泉帝の立坊、光源氏の任大将は、光源氏二十一〔二十〕歳の年で、物語では記事のない空白年[17]での出来事である。巻で言えば、花宴と葵との間のことで、光源氏の生涯では大きなエポックとなる空白年である。葵巻から光源氏の人生は、兄朱雀帝の外戚である右大臣派の世となって下降期に入り、賢木巻二十三〔二十二〕歳十一月の父院崩御により決定的な不遇期に入った。右大臣家での朧月夜との密会が露呈したのを機に光源氏は、自ら須磨に退き、さらに明石に移動し、都に召喚されて権大納言に復官する澪標巻二十九〔二十八〕歳まで、その状態が続く。

であるから、帚木巻から澪標（関屋）までの光源氏の青年期は、桐壺帝在位時の十歳代における得意の青年前期と、二十一〔二十〕歳の空白年を挟んで、朱雀帝在位時の二十歳代における不遇の青年後期とに分けることができる。

三十〔二十九〕歳の記事のない空白年をおいて、光源氏の中年期は

三十一〔三十〕歳から三十九歳初冬、巻で言えば、絵合巻から藤裏葉巻までにわたって展開する。この時期は、実子冷泉帝の在位時で、尼となった藤壺宮存命時は、光源氏の恋人であった母女院が帝の背後にいて光源氏を陰ながら支え、光源氏は、かつての左大臣を摂政太政大臣として頭に据え、自らは帝の兄で内大臣として朝廷の中心に座り、恋人六条御息所の遺児斎宮女御が、光源氏の養女として入内し、絵合の行事に象徴されるごとく、冷泉帝後宮を制覇して、国母藤壺と組んで実権を掌握した。

だが、藤壺三十七歳、光源氏三十二〔三十一〕歳の年、薄雲巻で、摂政太政大臣薨去・藤壺宮崩御・夜居の僧の密奏による冷泉帝の光源氏実父確認により、光源氏は以後、孝心篤い冷泉帝の実父として、一人権力を把握し、自立するにいたる。さらに藤壺宮崩御の翌年、三十三〔三十二〕歳、少女巻第一年で、養女斎宮女御が立后し、安心して光源氏は太政大臣[18]となり、政治の実務を新内大臣に譲り、自らは六条院を造営して、風流の生活に入って行った。青年前期の恋人夕顔の遺児玉鬘が養女として六条院に入り、光源氏の中年期の私的生活を彩っていくのもこの時期である。

こうして、光源氏の中年期は、光源氏の恋人で冷泉帝の母である藤壺宮崩御を境に前後に区分することができる。藤壺宮と連携して権力を確保した前期と、冷泉帝の実父として太政大臣となり、中宮の父となって最高権勢を得た後半である。その境は、薄雲巻春の藤壺宮崩御と同年夏に薨去した桃園式部卿宮の娘朝顔の姫との旧縁の懸想譚が、父の喪で退下した同年秋から冬にかけて朝顔巻で語られるが、この紫上を苦しめた朝顔姫との旧縁懸想譚は、藤壺宮崩御に連動した光源氏の上の品女性への接近・整理として理解され[19]、藤壺宮崩御の派生譚と見なされるので、朝顔巻と、三十三〔三十二〕歳少女巻との間に置くことができる。

少女巻は、第一年で藤壺宮一周忌、斎宮（秋好）女御立后、光源氏の太政大臣昇任、第二年に六条院造営、第三年に六条院移徙を語って光源氏中年期の最盛期への準備がなされるが、同時に、澪標巻光源氏二十九〔二十八〕歳で元服即位した秘密の子冷泉帝に続いて、葵上腹の息子夕霧の元服と源氏家後継者としての彼に対する教育、彼と雲居雁との恋愛が語られ、父親世代としての光源氏の姿が顕著になる。この夕霧の雲居雁との結婚と明石姫の東宮入内が、光源氏中年期の最後の年三十九歳藤裏葉巻で語られ、秘密の子冷泉帝に続きすべての子が結婚生活に入って、親として一安心の境地に至り（「御心落ちゐはて給ひて今は本意も遂げなむとおぼしなる」藤裏葉一〇一二）、光源氏自身も冷泉帝の実父であることに由来して、准太上天皇となり、自己の人生の頂点となる一画期を迎えた。光源氏が冷泉帝の実父として准太上天皇になれた表の事情については、高橋和夫氏に論がある。氏は、光源氏の経歴・業績・人物に関する最高評価を前提に、太政大臣致仕後の処遇として、即位も可能であった一世源氏、臣出自者である藤原詮子院号宣下等の歴史的先例を勘案しつつ、公卿僉議で、准太上天皇の名称転用を新たに決定した、と推測されている[20]。

光源氏の老年期は、四十歳から四十一歳の事跡を語る若菜上巻と若菜下巻頭部において、准太上天皇にふさわしい配偶女三宮の六条院入

り、東宮に入内した明石女御の懐妊・出産という中年期からの展開事項と、それ自体老年期の新しい事件である女三宮の六条院入りと、子世代の柏木による女三宮垣間見と唐猫を介した柏木の女三宮執心の固着を語った後、若菜下巻に置かれた四十二歳から四十五歳まで四年間の空白期間を隔てて、聖代と言われながら後継となる皇子が生まれぬまま在位十八年が過ぎ、冷泉帝が病を機に、明石女御腹の第一皇子が新東宮になるとはいえ、二十歳となった今上帝に譲位せざるを得ない状況が出現し、准太上天皇である光源氏自身の地位に変化はないものの、新帝の外戚鬚黒が右大臣として政治をとり、光源氏周辺の政治的環境が変化してしまう。光源氏自身も四十六歳となり四十歳代の後半に入って老境が深まり、紫上も三十八歳と老いが近づく。一方今上帝の妹女三宮は二品に昇り、二十、二十一歳の女盛りとなる。翌年女三宮の父朱雀院五十賀準備の最中、出家も許されず心労極まった紫上が重病に陥ることで、若い世代の女三宮と柏木の密通と薫懐妊がもたらされ、全てを知った光源氏は青年期の藤壺宮との密通事件との因果を悟り、怒りを向けられた女三宮は尼に、柏木は死にいたる。さらに、息子夕霧の女二宮（落葉宮）とのスキャンダル、紫上の逝去へと余波は拡大して、五十歳代に入った光源氏は出家を準備し、後の匂宮巻や宿木巻で言及されることになる出家隠遁生活と死を迎えて、その一生を終える。

　であるから、光源氏の老年期は、若菜下巻に置かれた四年間の空白期の前後で二分される。青年期の藤壺宮密通事件との因果を自覚する女三宮柏木事件の準備がなされる四十・四十一歳時の前半と、紫上の出家希望と朱雀院の五十賀準備を背景に女三宮柏木事件が具体的に進展して、光源氏の老いが若さに侵蝕されていく四十六歳以降の後半とである。

　また、光源氏の老年期では、光源氏の四十賀での、鬚黒との結婚後に誕生していた玉鬘の子、つまり光源氏の外孫の登場、夕霧の子、同じく内孫の存在の言及、朱雀院五十賀の試楽でのそれら内外の孫たちの舞、明石女御の引き続いての皇子皇女の出産など、祖父世代としての光源氏の姿も顕著になる。

　こうして、光源氏の幼童期、青年期、中年期、老年期は、七歳の読書始め、天皇在位の変化、藤壺宮の崩御など、光源氏の生活環境、人間関係の変化により、それぞれ前後に二分される。これらの推移の中での光源氏の人生の浮沈、子、孫世代との関係も追っていくことができる。

四　光源氏の人間的成長

　こうした生涯シーズンの展開によって、光源氏はどのような人間的成長を遂げたのであろうか。寵妃の遺児で非凡な資質と才能を有して、臣下に降るべき状況ながらも、父帝の寵愛を受けて親王同様に宮中で育ち、源氏となっても宮中に曹司を与えられ、帝の妹を妻とする左大臣の婿となり、父帝の愛と信頼の下で、「帝の御前に夜昼さぶらひ給ひて奏し給ふ事のならぬはな」（須磨四一一）く、「帝王の深き宮にやしなはれ給ひて色々のたのしみにおごり給ひし」（明石四四三）光源

氏が、須磨に赴くまでの児童期・青年期に、驕りの極にいたことは、自身の言動や語り手の言辞に明らかだ。[21] が、二十歳代の青年後期、父院の譲位崩御後、光源氏の子である東宮を守るべく尼となった藤壺の決意を前にし、若年のすきわざにより自ら招いた須磨明石の流離体験を経て、都に復帰して、周囲の「我もいかで人よりさきに深き心ざしを御覧ぜられむとのみ思ひきほふ男女につけて高きをもくだれるをも、人の心ばへを見たまふに、あはれにおぼし知ることさま〴〵」（蓬生五二五）であった光源氏は、独りよがりの驕りのむなしさを知り、人間観・人生観を変えていく。実子冷泉帝の後見役として朝廷の中心に立った中年期の光源氏は、公的な責任感のみならず、私的な恋愛面でも、斎宮女御や朝顔姫君に、若年時のすきわざを反省し、分別を示して、深みにはまらず、高揚する恋情に苦悶した玉鬘に対しても、紫上や内大臣・夕霧など周囲の存在、自身の心の点検により、踏みとどまり、鬚黒に玉鬘を奪われて、恋の敗北者となった。青年期とは異なるこの分野での成長・衰えであり、女三宮事件の先蹤でもある。

老年期に入って、受け身的とはいえ、女三宮を六条院に迎え入れて、長年の伴侶紫上を苦しめたことで、自身のすきの中年的進化形である「あだけ」を反省し、女三宮柏木事件に直面して、過去の藤壺宮密通との因果を自覚し、[22] 父院の配慮愛情に思いを致して、自分を無視したことに怒りを抱きながらも、柏木を衝き動かした抗しがたい恋情に関しては自身の若年時の藤壺宮体験から理解を示して、女三宮の出家、柏木の死後は、薫誕生の因果を認め、事件を受け入れていった。ここに光源氏の人格のさらなる成長をみるのだが、女性に対する恋情ばかりはいつまでも抱き続け、尼になった女盛りの女三宮にも未練を持ち続けたし、自分の人生にかけがえのない特別の存在となっていた紫上に対しては、出家も許すことができず、その死に至らせてしまった。それがもたらした慟哭は、光源氏の人生最後にして最大の悲哀であったが、老年期に入って明確に示し始めた自己の人生の回顧・述懐は、紫上の死を体験して、出家を早くから促していた仏の導きの認識をもたらし、栄華に到達した中年期に嵯峨野の御堂建立で具体的に進展し始めていた出家への意志が、紫上なき今ようやく実現へと進んでいくのである。だが、遁世出家実行の前年末、五十二歳の暮れになっても、紫上喪失の悲しみは消えない。紫上追慕の情を抱いたままの出家になりそうである。その年の三月、光源氏が明石御方に語ったように、

年経ぬる人に後れて心おさめむかたなく忘れがたきも、たゞかゝる仲の悲しさのみにはあらず。幼き程より生ほしたてしありさま、もろともに老いぬる末の世にうち捨てられて、わが身も人の身も思ひつゞけらるゝ、悲しさのたへがたきになむ。すべて物のあはれもゆゑある事もをかしき筋も、広う思ひめぐらす方かた〴〵そふ事のあさからずなるになむありける。（幻一四一三）

紫上は単なる最愛の妻であるにとどまらず、ともに幼くして母に先立たれて祖母に養育された境遇を共有し、容貌も藤壺・桐壺更衣を介して「似たところが多かったはずで、その意味で父娘・母子・兄妹といった身内的イメージを濃厚にひきずっている」。[23] 光源氏は、そうした紫上の中に己自身を見、紫上の祖母の死後、四年もの間、親代わりに紫上を育て教育した父であり母であり兄なのであって、「肉親の縁の

薄い者同士の孤独感も加わって」二条院引き取り以降、紫上は光源氏にとって「他人でありながら身内以上の一体感で結ばれる」不可分の一部となっていたのである。紫上の死は自身の一部の死にも相当したのである。

この紫上の死後、翌年五十二歳の初冬に、「雲居を渡る雁の翼も、うらやましくまぼられ」て光源氏の詠んだ、

大空を通ふ幻夢にだに見え来ぬ魂のゆくへ尋ねよ　（幻一四一九）

の歌は、遥か以前、光源氏の前史時に、父帝が亡くなった桐壺更衣を偲んで詠んだ、

尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく　（桐壺一七）

と、長恨歌の故事詩句を下敷きに、愛する人の魂の行方を知ろうとする願いで満ちた相似形をなしている。光源氏は、宮廷の歌語りとして、父のこの詠歌を知っていただろうし、自分が生まれてきた背景であり前史である両親の宮廷内・貴族社会において孤立した純愛の成り行きをも、母更衣の死後も、光源氏の周りにとどまった侍女たち、祖母その他から聞いていただろうから、光源氏の「大空を……」の詠歌は、十分に父帝の体験を意識してのものであったかもしれない。偶然の一致であったのなら、両親の体験が無意識のレベルまで光源氏の体内にしみこんでいたと言える。相思相愛であったかは別として、父と息子は、帝と一世源氏という公私の立場の違いを持ちながら、最愛の女との孤絶した愛の体験と別れを共有したのである。

どちらがより深い思いであったか。父の場合は、「尋ねゆく……」歌は、女の四十九日が終わるか終わらない頃、悲しみも癒えず長恨歌等の故事を枕言にしていた最中の詠で、思いが直に伝わるが、直前に靫負命婦が、更衣の母に伝えた言辞には、

わが御心ながら、あながちにひと目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いさゝかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、たゞこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはて〳〵は、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとゞ人わろうかたくなになり侍るも、前の世ゆかしうなむ。　（桐壺一四）

とあって、人づてながら更衣に対するやや愚痴と恨みぎみの思いが見える。こののち、更衣に生き写しの藤壺宮を迎えてからは、光源氏の元服時の母更衣の想起以外は、桐壺帝の桐壺更衣への思いをうかがい知ることはできない。[24] これに対し、光源氏の「大空を……」歌は、紫上の一周忌を過ぎてもなお、常世を行き来する（清正集四〇番歌・斎宮女御集一九二番歌など）「雁の翼もうらやましくまぼられ」、「自分もあのように飛べるものなら、紫の上をたずねてゆこうものを」（玉上琢弥氏『源氏物語評釈』幻巻一七〇頁）と、夢にさえ現れない紫上の魂の行方の探索を雁に託したもの。紫上が死後一年以上も「夢にだに見え来ぬ」と嘆き、今も雁の翼を羨んで、自分の替わりに長恨歌の幻術士によそえた雁に魂の探索を命じた点が、父とは異なる深刻な精神的打撃をうかがわせる。実際、「うなゐ松」におぼえて紫上の形見である中将の君にも、紫上喪失の悲哀が慰められることもなく、父にとっての藤壺宮のごとく、紫上の闕を埋める女性は得られずに紫上追

慕の情を抱いたまま、光源氏は出家遁世し、死を迎えたと思われる。紫上を自己の分身とし、老年を迎えてそれを喪失した光源氏の方が、衝撃は深かったというべきだろう。光源氏は、母に始原する、藤壺宮、紫上とは、父以上の、父とは異なる愛恋の体験をし、夕顔・六条御息所・玉鬘・女三宮らとは、それに次ぐ苦悩の体験もしたのである。光源氏の准太上天皇称号獲得とそれにふさわしい内親王を正妻に迎え得たのも、藤壺宮との体験に由来することを思えば、源氏物語において光源氏の恋愛体験の唯一無比の偉大さは疑うことができない。青年期の藤壺宮密通事件と老年期の女三宮柏木事件の呼応の因果も、光源氏は薫の出生に際し「この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪も少し軽みなむや、とおぼ」（柏木一二三四）して、逆にこれを「救い」とし、「すべてを、自分にいいように解釈しようと努め」（玉上氏前掲書柏木四五頁）、さらに女三宮を尼に、柏木を死に追いやり、乗り切った。密通の重なりは一生の大事件であったが、この密通の因果をも、最愛の女を失った男の慟哭である、光源氏前史の桐壺帝の「尋ねゆく幻もがな……」歌と、光源氏老年期の「大空を通う幻……」歌との呼応は、間に挟み込んで存在せしめている。源氏物語正編が、最愛の女を喪失した男の物語で始まり、また終わることを明らかに示しているのだ。（宇治十帖の始まりと終わりもこれに類比的だろう。）女三宮事件に耐え、その後も生き続けてきた光源氏が、「今日や、とのみ、わが身も心づかひせられ給ふをり多」（御法一三九八）くなり、「物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日やつきぬる」（幻一四二三）と、自分の人生の終末を意識するのは、紫上喪失の結果なのである。これによっても、光源氏生涯の最大の痛手「来しかたゆく先も例あらじとおぼゆる悲しさ」（御法一三九五）が、紫上の喪失、払いきれない孤独感の襲来であったことがわかる。それに耐えて出家に足を踏み出す光源氏の姿に、偉大な人物の偉大な生涯の到達を見るべきだろう。源氏物語が光源氏とともに見つめてきたものも、ここにある。

〔注〕

（1）藤村潔氏『源氏物語の構造第二』三九五頁。

（2）「もとだち」の語例は、多くは拾えないが、次の歌が参考になる。「ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る」（手習二〇二〇）。

（3）三谷栄一氏『物語文学史論』「カタリゴトからモノガタリへ」。

（4）三谷氏注3前掲書「物語の主人公　変化のもの」。

（5）久松潜一博士『上代日本文学の研究』。

（6）森岡常夫博士『源氏物語の研究』。もっとも森岡博士は後の「源氏物語の成立・構想論の研究」『源氏物語講座第二巻』昭和四六年、では、青春期を藤岡作太郎と同じく朝顔巻までとされる。

（7）岡崎義恵博士『源氏物語の美』、重松信弘博士『増訂源氏物語の構想と鑑賞』。

（8）高橋和夫氏『「源氏物語」の創作過程』。

（9）田坂憲二氏「『源氏物語』の編年体的考察―光源氏誕生前後」『源氏物語の展望』第四輯、に推定案がある。

（10）E．H．エリクソン『老年期』朝長正徳・朝長梨枝子訳。

（11）D．レビンソン『ライフサイクルの心理学』上下、南博訳。

（12）引用書戸令補注6aに、「なお天平勝宝九歳四月には、中男・正丁の年齢をそれぞれ一歳引き上げ、翌天平宝字二年七月には、老丁・耆老の年齢をそれぞれ一歳引き下げ、課口の範囲を縮小した（三代格）」

とある。

(13) 永井和子氏『源氏物語と老い』。

(14) 永井氏注13前掲著九七頁。

(15) 永井氏注13前掲著九三頁・八四頁。

(16) 「古人」は、年月を経た人、ベテラン、を意味し、光源氏に関してはこれが唯一例である。

(17) ここを始めとした物語内の空白年の存在と関わらせて、光源氏の人生を十年単位で構想されたものと見る理解は、本稿のライフサイクル論的立場にとっても有用である。藤村潔氏『源氏物語の構造第二』、高橋和夫氏「光源氏の生涯」『「源氏物語」の創作過程』、参照。

(18) 村口進介氏「『源氏物語』太政大臣攷」『国語国文』二〇二〇年八月、は、光源氏は太政大臣として、政治の第一線を譲りながらも、父院不在の冷泉帝の後見をしていたと説く。

(19) 森藤侃子氏「朝顔巻の構想」『講座源氏物語の世界』第四集、参照。

(20) 高橋和夫氏「高麗人の予言」『「源氏物語」の創作過程』。

(21) 拙稿「光源氏の驕り」『京都語文』二〇二〇年十一月、参照。

(22) 青年期の光源氏は、某院で夕顔を喪失した当座も、おそらく描かれていない藤壺宮との密通の報いを意識していた。拙稿「女をうしなう光源氏—青年期の喪失体験」本誌二〇一四年三月、参照。

(23) 以下の引用は、伊藤博氏『源氏物語の基底と創造』一七三頁による。

(24) 拙稿「女をうしなう光源氏—前史、父桐壺帝の喪失体験」『京都語文』二〇一三年十一月、参照。

〔付記〕

—源氏物語の引用は、『源氏物語大成校異篇』による。最小限の範囲で、諸本により本文を訂し、仮名遣いを正し、読みやすいように、漢字をあて、送り仮名・濁点・句読点等を付し、文を整えた。漢数字は頁数。

（うえの　たつよし　日本文学科）

二〇二〇年十一月十六日受理